

虹と日本文藝(十)

——日本辞類書等をめぐって(1)古典編——

小 序

辞書・類書等は、それ自体、国語学の資料あるいはその研究対象として重要なものであるが、本研究のテーマたる「虹と日本文藝」に関してみれば、日本文藝の作者の教養的媒体として重要な関係資料あるいは補助研究資料の位置にたつ。そしてこれらは、作者を含有しつつ広がる文化的土壌の象徴的存在の一つでもあるであろう。よって次に、日本の辞書・類書・音義書史上、重要と思われるものを、凡そ時代順にピックアップしつつ、(ニジ)に関する事項について調査してみた。ただし、総て大和系のもので、北辺・南島のものを含まない。

荻野恭茂

上代

40

(a)

日虹

胡公及江者者
不足者云

雙出昇出成者為唯

日虹暗者為唯

(b)

青虹

古文作虹同胡公及説文端殊也似虫字
後古傳者考天人婦音帝殊奇者

色虹

亦音

色非古義之在霞也。乃者為非、或虹情者為
唯、日悅、或作霓、音止、又音在、色在、青也。

(c)

天巧

天巧、音幸、乃天、巧也。音州、乃天、信、音、倭、倭、
鮮、咸、者、虹、情、味、者、石、悅、音、久、美、也。

(e)

虹電

古文、同、胡、公、反、說、文、蟠、蜺、也、音、
義、日、雙、出、鮮、感、者、為、准、音、日、虹、時

為、準、釋、名、虹、也、隸、陽、政、陰、氣、也、婦、音、帝、棟、音、董

(f)

白虹、古文、扯、同、胡、公、反、說、文、蟠、蜺、也、音、
也、俗、呼、美、人、江、東、呼、為、寧、釋、名、虹、
攻、也、隸、陽、攻、陰、氣、也。

私註 (一) 『一切經音義』(大治本) (二) a 卷第一 b 卷第十
五 (c) 卷第十九 (d) 卷第二十一 (e) 卷第二十五 (三) 仏典
辭書 (四) 唐の貞觀(627~629)の末↓奈良時代の末 (五) 文應
[六] 古辞書音義集成第七・八・九卷 『一切經音義』(上・中・下)
(昭55・55・56、汲古書院) [七] (a) 上 P 50 (b) 中 406 (c) 中
518 (d) 中 P 572 (e) 中 P 718 (f) 下 391 [八] 法隆寺一切經 大
治三年書写本 宮内庁書陵部蔵 (f) は高麗蔵本。

〔考〕資料 [9] 参照。『爾雅音義』の影響を多分に享けていることは
一目瞭然であるが、「日虹」とその義などにはやや疑義がある。と
まれ「虹」は、かく音義書に採択されているということは、仏
典中、難字・難語・注意を要する語、の部類に属するものである
ということであり、またこの書が、『新撰字鏡』等、日本の古辞書
の成立に影響を与え、また自身書写されてきたものであることを
考えると、「ニジ」文化の面からも興味深い。なお「天弓」はイン
ド↓中国↓日本、のプロセスであろう。

41

如虹蜺

如古卷胡
二又規

実研美及奈、奈、音、今日虹蟠蜺也。謂陰陽交接
之氣而着之。飛色靡者。日虹唯。日規也。唯

私註(一)『新譯華嚴經音義私記』(小川廣已藏)(二)下卷(如虹
 蛻)(三)仏典辭書(四)奈良時代末期(小林芳規筆「序」)(五)
 未詳(六)小林芳規解題・石塚晴通索引・古辭書音義集成(第一
 卷)『新譯華嚴經音義私記』(昭53、古典研究會)(七)P138(八)
 小川家藏本が現存唯一の伝本。卷子本。元禄六年法印英秀・修補。
 「慧苑撰述の新譯華嚴經音義」二巻と大治本新華嚴經音義(祖本)と
 を土台として、これに加筆をして成ったもの。(岡田希雄「新譯華
 嚴經音義私記倭訓攷」国語国文第11巻3号)
 (考)内容は古代中国類書(8)~(10)等)と同系。

中古

42

蛻 (a) 予難及寒烟

(b)

虹 胡公及同上

蛻 丁計及蛻

蛻 丁孔及蛻

背 虹字

私註(一)『篆隸萬象名義』(高山寺本)(二)(a)第六帖九〇ウ

(b)第六帖九三ウ(三)漢字辭書(四)平安時代初期(天長四年
 (877)) (五)空海+a(六)高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺
 古辭書資料』第一、第一部「篆隸萬象名義」(七)(a)P317 (b)P
 319(八)書写は、奥書によれば永久二年(三三〇)。「本高山寺伝
 藏本は、古写本として天下唯一のもので、他に伝へられる江戸期
 以降の写本も、本高山寺本の写しである。これらの点から明治三
 十二年にすでに国宝に指定され、現在も国宝となっている。」(白
 藤禮幸「解説」) 中国唐代の『玉篇』(大部分佚)を下敷きにし、
 篆体を加え、単字として注を加えた。(「解説」)

(考)第四帖までは「空海撰」であるが、第五帖以下は「統撰」で、
 撰者は別人(+a)のようであるが、それが誰かは未詳。(「虹・蛻・
 蟬・蝻」は第六帖所収であるから空海原撰でないことになる。邦人
 撰述の辞書としては最古のものであるゆえ、「ニジ」記事としても
 興味深い。(a)で、「蛻」を「寒蝻」としている。「虹・蛻・蟬・蝻」
 のみ。

43

虹 蛻 上列各字を注す

蛻 同作「計」及「蛻」之在陽更之氣者之也之故之也

蛻 同作「計」及「蛻」之在陽更之氣者之也之故之也
 蛻 同作「計」及「蛻」之在陽更之氣者之也之故之也
 蛻 同作「計」及「蛻」之在陽更之氣者之也之故之也

私註 (一) 『新撰字鏡』(天治本) (二) 卷第八「虫部第八十三」
(三) 漢和辞書 (四) 平安時代初期・昌泰年間(898~901) (五)
僧・昌住(伝未詳) (六) 京都大学文学部国語學國文學研究室編
『天治本 新撰字鏡 増訂版』(昭48、臨川書店) (七) P 501・502
(八) 享和本・群書類従本にはナシ。
〔考〕古代中国南方の文化を担う「虹蜺」の方が先に、北方の文化
を担う「蠅蠓」の方が後に記載されている。どちらも動物的存在
を表すが、とにかく両方が載っていることに注目。cf. ①。

44

虹

毛詩注云 帝董二音 蠅亦作 蠓 也 董音 董也

虹 五音 董又与 蠅同 今按雄曰 虹雌曰 蜺

(b)

虹

毛詩注云 蠅 蠓 也 董音 董也 蠅亦作 蠓 也
董音 董也 蠅亦作 蠓 也
董音 董也 蠅亦作 蠓 也

(c)

虹

毛詩註云 蠅 蠓 也 帝 董 二 音 蠅
又 作 蠓 爾 之 兼 名 苑 云 虹 一 名 蜺
五 稽 反 與 蜺 同 又 五 結 倪 擊 二 反
今 按 雄 曰 虹 雌 曰 蜺 也

(d)

虹

毛詩注云 蠅 蠓 也 帝 董 二 音 蠅 又 作 蠓 也
今按雄曰 虹雌曰 蜺也

蜺

五稽反与蜺同又五结倪擊二反今按雄曰
曰虹雌曰虹雌曰一也

私註 (一) 『倭名類聚鈔』(二) 卷第一(虹) (三) 類書 (四) 平安
時代中期・承平四年(934)ごろ (五) 源順 (六) 馬淵和夫著『和
名類聚抄』(古写本本文および索引) (昭48、風間書房) (七) P 13 14・
253 (八) (a) (b) || 十卷本系 (c) (d) || 二十卷本系 (a) || 真福寺本
|| 前田家本 (c) || 元和古活字本 (d) || 伊勢本廿卷本

〔考〕正統とされた漢語に対して「倭名」すなわち「日本語の名
詞」を蒐集したものであり、そこに「虹」と「蜺」がある。ただ
し、「和名 爾之」の万葉仮名で記されているのは「虹」。すなわ
ち「虹」の方がより一般的であったようである。十卷本系では「虹
(蜺)」は、天部部「風雨類」に、二十卷本では、天部「雲雨類」
に分類されている。大差はないが、分類の仕方から見ると、どち
らも気象現象の認識を持ちつつも、尚一方、「今按雄曰虹雌曰蜺
也」と、原初的(二シ)「観、特に中国古代に顯著であった(二シ)
観が払拭されていない。

また、「暈」との関係を見ると、「暈」は、月一弦月一望月一暈
一蝕……と配列されて、第一「景宿類」に分類されている。月
を巡る一連の現象の中にあるわけであるが、「暈」に関しては月の
みでないことは、「郭知玄切韻云暈氣繞日月也音運此間云日月加左
辨色立成云月院也」(・は筆者)とあることによつて知られる。先

述のごとく「虹」は、離れて、「雲雨類」または「風雨類」の中にあり、とすると、撰者・源順の意識の中では、(古代中国におけるほどには)、「虹」と「暈」は親密な関係にはなかったようである。

なお、『国語学大辞典』(吉田金彦筆)には、「部類は白氏六帖にならぬ」とあるが、「虹」の部分の内容面では「雄曰虹雌曰蜺」が類似していることくらいで、あまり深い繋がりは見出せない。(資料16参照)

とまれ、本書は、日本最古の漢和辞書的性格を有する類書、いわば百科辞典であるが、日本文藝との関連を考える上では、『伊勢物語』の原形、『土佐日記』あたり以後の作者、貴族・僧侶等の知的情報のソース・教養の一端として、[43] (『新撰字鏡』)と重層させて、また順の『万葉』研究の足場確認として、必見の資料であろう。

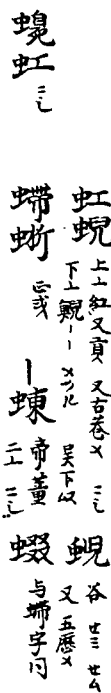
45



私註 (一) 『色葉字類抄』(黒川本) (二) 仁・天象付 (三) 国語辞書 (四) 平安末期・治承年間 (二二) ~ (二八) (五) 橋忠兼 (六) 『色葉字類抄』研究並びに総合索引 黒川本・影印篇 (昭52、風間書房) (七) P 70 71 (八) 黒川真三男氏蔵江戸中期写本

〔考〕平安末期以降の、特に和文脈中の普通漢字によって表記する習慣のある語、その中に、「虹」「蜺」「蜺」が入っていると考えられるが、「蜺」はともかく「蜺」はいかがであろうか。

46



私註 (一) 『類聚名義抄』(観智院本) (二) 僧下一八 (三) 漢和辞書 (四) 平安時代末期・十二世紀初 (五) 編者は僧侶であるが未詳。交点・書写||慈念、書写||顕慶。 (六) 正宗敦夫編纂・校訂『類聚名義抄』第一卷 (昭50、風間書房) (七) P 56 (八) 建長三年を降ることいくばくもなくして転写 (中田祝夫説)

〔考〕和訓のアクセント、声点を有するということは、「和訓のアクセントは、平安時代の京都語のアクセントを知る上に絶大な価値をもつものであるが、「古代語がすべて訳語となったのではなく、漢文訓読用語として、男性系統に淘汰され、そのうち後に伝えられたものが、漢字の和訓となることを知らなくてはならない」(中田祝夫「類聚名義抄使用者のために」)とあるが、これを考慮に入れた上で眺めると、「(二シ)に関する説が採択されていること自体に深重な意味が感じられてくる。また、これは、王朝女流文学等にあらわれる新興の和語の世界からは遠いことになる。

47

アクセントは左のような記号を用いて示す。●○●○●はそれぞれ一拍を表わす。

● 高く平らな拍
○ 低く平らな拍

● 高から低にくだる拍
○ 低から高にのぼる拍

かせ「風」 今多平安・鎌倉・江戸●●

こと「事」 今多平安・鎌倉○○○室町来●○

あめ「雨」 今多平安・鎌倉・江戸○○●

いぬ「往」 今多平安●●○

にじ「虹」 今多平安○○○

私註(一) 平安時代の「虹」のアクセント(二) アクセント(四) 平安時代(六) 『日本国語大辞典』(昭47、小学館)〔七〕 P 8 (八) 文献の記載をもとにして推定された京都アクセントである。ア史 II アクセント史 平安 II 平安時代(「虹」以外の風・雨、等をも参考)に付した。

中世

一虹ノ形ノ何ノ所愛ノ様ノイキニ
虹ハ月輪ノメクリノ半ヨリ上カエラミ味ヲ三凡
七博聞録 虹霓ハ但是雨中日影ナリト云 虹
オニシニ霓ノメニト云ヲトアトモイキ地アラハハ實
ノ雌雄モハカラスサレトモ出處ノミタカク

物思ハナラセルニニ字科ニニ動物用ノ實義ニ
ソムケテ雲ノウキ所ニ虹ヲ云フ又影ヲウロヒ
ナ別ニウキキ虹見ルコトモアリ是等ヲナシ
オニト云フ目西ノハ虹東アリカクノラフ
カヒテ見エソラノ目ノ影ヲ見ルワカレ目
輪ナモトモカケニウキ時ハソヒタシキ五十一
由旬ノ形ノウツセハカネトナリトモヤシム
ナニアラハ日本今記ニハ虹又ニトヨネリト今ハ
ニシト云フナラセリ和語ノ古今ニオケルカナル事
コレニカクナルハ又鎮星散ニテ云フコトモ
アリオエツカナナキ事也

私註(一) 『塵袋』(二) 第一・天象「虹」(三) 類書(四) 鎌倉時代・文永弘安のころ(1264~1287)か〔五〕不明〔六〕覆刻日本古典全集『塵袋』上(昭52、現代思潮社)〔七〕 P 112〔八〕編次は『色葉字類抄』(II 資料43)の意義分類を受ける。12行目の上に「イカホト」の加筆がある。

〔考〕一行目は『罪雪録』(比較研究資料12)の系譜にあるが二行目以下は、漢籍『博聞録』を引きつつ、この時期としては意外に(科学的)な見解に立っている。鎌倉時代の武士・貴族を主たるターゲットにした教養書であるが、内に強い啓蒙的意欲を滾らせていることが透視される。そしてこの精神は、さらに享受層を広げて、『塵添塩叢鈔』(II 52)として後代に永く影響を及ぼして行く。

49

張	現	凝	霜	雪	封
而為	送代	其轉	運也	和而	為雨
亂而	為霧	凝而	為霜	雪張	而為
常數	也	天	之		

孫思邈曰天有四時五行日月相推寒暑

私註(一)『醫家千字文註』(二)四丁(三)医家千字文と註(四)鎌倉時代(永仁元年1293)撰抄、(永仁二年)書写畢(五)惟宗時俊(六)製本所||尾州名古屋本町通七丁目・片野東四郎原語は『舊唐書』卷一百九十一・列傳第一百四十一・方伎・孫思邈として見える。

下つて近世期(寛永九年)の『善隣国宝別記』七医解一にも「張為虹霓天常數也」の文言がみえる。『統群書類従』三十一上〔考〕孫思邈は中国唐代の人(581~682)で、「陰陽推歩医学の術をきわめ(近藤春雄『中国学芸大事典』)たという。陰陽道を絡めた漢方医学の中に(虹霓)が関与している。撰抄・書写しているのが、散位正五位下・惟宗時俊というのも興味深い。また「張」の表現にも注目。

50

霓
虹
蜺
蜺
蜺
蜺

51

虹
義同

私註(一)『倭玉篇』(二)下 霓||326、虹||411、蜺||412、蜺||415、蜺||417 (三)漢和辞書(四)室町時代初期? 長享三年1489(古写本の識語)(五)不明(六)中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇研究並びに索引』(昭41、風間書房)(七)P 89 113 114 115〔考〕「蜺」が入っていることに注意。

私註(一)『下學集』(元和三年版)(二)卷之上「天地門第一」通俗漢字辞書(四)室町時代中期・文安元年(1454)(五)「東麓破納」とあるのみで未詳(六)山田忠雄監修・解説 古辞書叢刊(第二)元和三年版『下學集』(昭43、新生社)(七)P 17〔考〕通俗漢字辞書のゆえか、「蜺」等、もと『詩経』出で『類聚名義抄』(資料46)に見えるような漢字は採取されていない。「序」に「下学集は室町時代中期成立の 名彙の 一、名彙としては 室町期・江戸期を 通じて もっとも ひろくおこなはれた。」とあるが、とすると、「蜺」等はやはり、ポピュラーな語でなかったことの反映と見ることができるといえる。

虹事

△虹ト云フハ何所喪^{イキ}カ^カイキ^カカ^カ 虹日輪ノメグ
 リノ半ヨリ上^カア^カグモ^カ映^カシテ見ル也^カ 虹^カ 虹^カ
 但是兩中^カ日影也ト云ヘリ虹ヲニシ^カ 虹^カニニト云
 フ事ア^カレトモ生物ニアラ子^カバ實^カ雌雄有ヘカヲ不
 サレドモ虫^カ篇^カシタカヘテ^カ動物ニ思ナラハセル故
 ニ字對^カ動物用^カ實義ニハ背ナリ雲ノウスキ取ニハ
 虹^カウスク見^カ又影^カウツロヒ元^カ別^カウスキ虹^カ見^カゴトモ
 アリ是^カ等^カヲ分^カテ雌^カ雄^カシラニト云^カ 虹^カ 虹^カ
 七

蓋葉卷卷下
 七

バ虹東アリ影ノウツルニ向テ見子空ノ目ノ勢ヲ
 見レバ僅ナル日輪^カ思^カ一^カ正影^カウツス時^カツビタ^カシ
 キ也五十一由旬ノ輪形^カウツセバイカホド大也ト
 モアヤシムヘキニ非ス^カ 虹^カ又ニト讀^カメルノ
 レヲバ今ニシト云^カ習^カせリ和語ノ古今同カラサル
 一^カ是^カニ限^カラサル^カ 虹^カ又^カ鎮星^カ散^カシテ^カ爲^カ虹^カ云^カヘル^カモ
 アリ^カ 虹^カ東^カナキ^カ也

私註 (一) 『塵添壺囊鈔』(二) 卷十 虹事 (三) 類書 (四) 室町
 時代中期・文安三年 (一五五五) (五) 觀勝寺・金剛佛子行譽 (六) 濱
 田敦・佐竹昭広・笹川祥生編『塵添壺囊鈔・壺囊鈔』(昭43、臨川

書店) (七) P 208

〔考〕内容的には48の系譜に属する。室町時代中期の一般教養書であるが、江戸時代以降も強い影響力を持つ。

黒本本	伊京本	天正本	饅頭屋本	易林本
虹	虹	虹	虹	虹
虹	虹	虹	虹	虹
虹	虹	虹	虹	虹
虹	虹	虹	虹	虹
虹	虹	虹	虹	虹

私註 (一) 『節用集』(五本対照) (二) 天部・ニジに関する語 (三) 国語辞書 (四) 室町時代中期・文明 (1469~1487) よりやや以前 (五) 略 (六) 亀井孝案並関・高羽五郎校並刻『五本対照 改編節用集』(昭49、勉誠社) (七) P 1417

〔考〕易林本に「塔」があるが、大勢は「虹」(「霓」)のみ。

○阿蘭陀人天氣見様

晴之分

(中略)

一 日出ニ虹タツ

……(a)

一 東ニ虹タツ

……(b)

(中略)

風雨之分

(中略)

一 西方虹立ハ雪ナリ

……(c)

(中略)

一 天氣能ニ虹立ハ大風ナリ

……(d)

以上

私註(一)『鹽尻』(二)卷之三(三)元禄十年(1697)頃から享保十八年(1733)まで執筆(岩波『日本古典文学大辞典』)(四)随筆(五)天野信景(六)『日本随筆大成』第三期九卷・十卷一の内九卷(上卷)(七)P 53・54

(考)元禄から享保にかけて比肩する者のない博識を謳われた著者(岩波『日本古典文学大辞典』)の「見聞録」の一である。オランダ人はこの頃、鎖国下、ヨーロッパに対して開かれた唯一の窓でもある長崎・出島に出入していた。(c)は「朝虹」のことであり、「雪」を「天候悪し」と拡大解釈すれば一般的なものである。(cf. (70) (d)はオランダ人らしいユニークさがある。

○蠅蜂非子曰蠅一身兩口爭食相齧相殺古今字註曰古之虻字也

信景按するに二首兩口貪害するもの天地の間ひ

とり此蟲のみならず同胞兄弟利を貪て互ひに害

心あるは人にして蠅の類といふへさのみ

龍古文竜ノ字 蒼古文蒼ノ字 藤同藤 虫同虹見三漢

盡音津氣液也 俗用三津ノ字一非也 行且ツ霞也又自ら矜也言行相會而自ら蠅

私註(一)『鹽尻』(二)卷之十六抄(三)随筆(四)元禄十年

(1697)〜享保十八年(1733)(五)天野信景(六)村瀬兼太郎編

『随筆鹽尻』上卷(明40、帝国書院)(七)P 262

(考)「垂同虹」とある。

にじ 虹(夫、十九、寂蓮)「時雨つ、にじつそらや岩はしをわたしは

てたるかつらまの山○次の西行のをふらまよめぬ虹の一名にや

〔同、同、西行〕高野に参りける時かつらま山に虹のたぢければ「さら

に又そりはしわたすこ、ちしてをふらま、れるかつらまの山

私註(一)『増補 雅言集覽』(二)にじ(三)古語用例集(四)

江戸時代末期・文政九年(1826)「い」く「か」六冊(五)石川

雅望・中島廣足補(六)石川雅望集・中島廣足補『増補 雅言集

覽』(昭53、臨川書店)(七)P 311

〔考〕『夫木和歌抄』の編者の分類に従いつつも、やや疑義をほさむ。

60

虹ニジ 萬葉集歌には、ノズとよみけり。今も東國

の俗にはノジともいふなり。倭名鈔にはニジと讀む。皆其語の轉なり。其義は詳ならず。

萬葉集に採讀てニといふ。ニといふは即採にて。シは詞助なりしに似たり。

又倭名鈔に。暈讀て日月のカサといふ。詳ならず。

私註 (一) 『東雅』 (二) 卷之一 天文一部 (虹) (三) 語学書 (四)

江戸時代中期・享保二年 (一) (五) 新井白石 (六) 国書刊行会編

『新井白石全集』第四卷 (明39《原》、昭52、国書刊行会) (七) P

26 (八) 『東雅』とは日東爾雅の謂なり、……和名類聚鈔によりて専

ら物名を解釋したるものにして、…… (黒川真道識「例言」より)

〔考〕「ニシ」についての思いつきの見解。

61

ふト

虹といふ丹のふトといふのまじりたる日本地ふトといふふト
よのトといふも登道書也今も東國の俗のトといふトと霞見記も電と
霞を掛くとたふト電とふトといふトとすふトと掛開録に虹電は雲下、影電
そよふと霞電録と霞電のトも電とと掛開の霞電のトとすふトといふト
まう虹電の字もふトといふトと西國の霞電のトといふトとすふトといふト
たトといふトとすふトといふトとすふトといふトとすふトといふトとす
ふトといふトとすふトといふトとすふトといふトとすふトといふトとす
ふトといふトとすふトといふトとすふトといふトとすふトといふトとす

私註 (一) 『倭訓栞』 (二) 前編二十「尔」の部 (三) 国語辞書

(四) 江戸時代中期 (五) 谷川土清 (宝永六一安永五年、1709 -

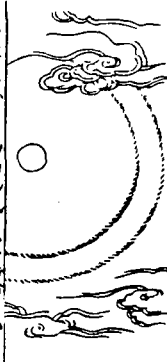
1796) (六) 発行『文政十三庚寅三月、書肆II (東都) 須原屋茂兵

衛・出雲寺文次郎 (京師) 風月荘左衛門・本屋儀助 (洞津) 篠田

伊十郎 (七) 四才 (八) 板本、和装
〔考〕「丹」の義、じはすぢの反也」はこじつけ。○以下不審。因み
に、海外には「女神イシュタルの首飾り」(cf. 30) や北極圈エスキ
モーに「虹の帯」が出てくる。(cf. 24)

62

(a)



わと
暈
唐音
運青
あま加佐

△按暈日月、恠氣也。有輪光、初如笠、將風雨、時生暈。如月
暈内、無星、則雨。有星、不雨。乃寶全書云、月生暈、有雨。月
生暈、主風。更有何方、缺風、從缺方來。
天文書云、暈乃空中之氣、直過日月之光、圍抱成環、有
缺者、圍者抱者、背者厚者、薄者皆長氣所注射也。月暈
者、必在中天、必在望之前後、上下、於内晦朔、則無暈矣。

(b)



虹
 虹霓 蝦煉
 水 燐煉 天ナ
 和名
 加名

月令云季春、月虹始見、孟冬、月虹藏、不見、葦也、日常依陰雲、而晝見、於日衝無雲、不見、太陰、亦不見、大率、見朝、西暮、東或云赤白色者為虹、青色者為霓、

釋名云虹、攻也、純陽攻陰氣也、
 △梅虹下干地、或飲井、或飲池、或垂首、於筵、吸飲食、雄曰虹、雌曰霓、之類甚、辛說也、天文書云虹、虹日氣下、垂吸動、地下之熱氣、則旋湧而起、其處或植井、或值池、見之人、以為虹、虹能吸水、也、實非、吸水、虹映日光之色、為紅綠也、紅者、火、綠者、水、氣、而為水火之交、故必向日、方也、中天日光盛、時無虹矣、試之日、在東、使人西邊噴水、人從中間看之、其水珠皆成紅、綠之象、其體變、然外黃中綠、而裏紅也、對日成虹、而他處復有一虹者、又虹影所自射也、有虹始見、虹藏、不見之期、見方必向于日、則非、蟲屬、明焉、

霏雪錄云、越中、有道士陸國寶者、乘舟出、見白虹、陸水甚近、及至其所、見、蝦煉、如、若、笑、天、白氣、從口中出、即跳入水、虹亦不見、予疑此非虹、老蝦煉之氣息也、

私註 (一) 『倭漢三才圖會』 (二) 卷三 一天象類 (一) 量 (一) 虹 (一) 蛭 (一) (b) (三) 図説百科辞書 (四) 江戸時代中期・正徳三年 1713

(五) 寺島良安 (六) 和漢三才圖會刊行委員会編・寺島良安『和漢三才圖會』 一上 (昭45、東京美術) (七) (a) p 30 (b) p 31 (考) 図示されている所が画期的。また、「△按」以下、和漢の字に精通していた著名な漢方医の編著らしく、見解が単なる引き写しに終らず、非常に「科学的」。ニュートンの時代に近い。

63

にじ (物類稱呼) 虹、東國の小兒のひと云尾張の土人鍋 (西國にていうと云云) 虹の路語か
 虹が立 京都にて虹がたつと云云 江戸にては虹がたつと云云 (夫木抄) 虹うちしくれ虹たつ秋の下紅葉染わたしたるかつらさの山如寂法師 (犬子集) 月くらき柿よりも口口と落 (とくふ句に) 虹たつ空のまじくなる神 (鷹筑波) 難波あたりで虫もふくらん (とくふ句に) 紀の海にいつた見ゆる秋の虹

私註 (一) 『増補 俚言集覽』 (二) 中巻「にじ」。「虹が立」(三) 国語辞書 (四) 江戸時代末期? (五) 太田全斎 (宝曆九一) 文政十二年 1759~1829 (六) 『増補 俚言集覽』 (1965) 名著刊行会 (七) P 857 (八) 明治三十三年井上頼圀らが通行の五十音順に改編し増訂を施した。『雅言集覽』に対して、俗語・俗諺をア……、イ……、ウのごとく五十音の横段の順に集め語釈を施した書。『物類稱呼』とともに江戸時代の口語研究の二大著と目される。『国語学辞典』所収、山田忠雄筆文による。『物類稱呼』は、越谷吾山著の方言辞書・安永四年 1775 刊。

〔考〕「江戸にては虹がふくと云」に注目。「物類称呼」の(西国に
ていうじと云は夕虹の略語か)は、「夕虹」ではなくて単なる(に
じ)の訛音であろう。(cf. 71)

64

虹

毛詩注云、蟬、蟬、帝、董、二音、蟬、作、蟬、和、名、爾、
董、與、蟬、類、集、引、合、五、篇、蟬、同、上、接、天、武、紀、
虹、字、訓、奴、之、萬、葉、集、上、野、國、相、聞、往、來、歌、亦、
謂、爲、努、自、一、虹、也、○毛詩傳二十卷、漢、毛、亨、
聲、之、釋、耳、一、虹、也、○毛詩傳二十卷、漢、毛、亨、
說、文、依、此、釋、名、虹、陽、氣、之、動、也、虹、攻、也、純、陽、
攻、陰、氣、也、又、曰、蜺、蜺、共、見、每、於、日、在、西、而、見、
於、東、堅、飲、東、兼、名、苑、云、虹、一、名、蜺、五、稽、反、與、
方、之、水、氣、也、兼、名、苑、云、虹、一、名、蜺、五、稽、反、與、
結、五、擊、二、反、今、案、雄、曰、虹、蜺、曰、倪、也、○按、孟、
子、趙、枝、注、見、於、非、時、此、次、氣、也、傷、害、於、物、
也、其、體、斷、絕、見、於、非、時、此、次、氣、也、傷、害、於、物、
如、有、所、食、齋、也、按、說、文、霓、屈、虹、青、赤、或、白、色、
陰、氣、也、又、云、蜺、蜺、也、二、字、不、同、後、人、虹、霓、
之、實、連、上、虹、字、變、兩、從、虫、故、干、祿、字、書、倪、霓、

上俗下正、遂與寒、蜺、字、混、無、別、下、總、本、擊、作、
與、按、五、擊、與、廣、韻、合、五、擊、與、龍、龜、手、繼、合、伊、
勢、廣、本、誤、脫、作、五、結、擊、二、反、那、波、本、作、五、結、
倪、擊、二、反、說、擊、與、古、今、韻、會、合、疑、那、波、氏、所、
見、本、亦、誤、脫、依、韻、會、增、蜺、字、也、曲、直、瀨、本、作、
五、結、反、無、五、擊、二、字、亦、恐、後、人、所、刪、雄、曰、
虹、蜺、曰、蜺、出、蔡、月、分、章、句、見、後、文、類、聚、又、
西、京、賦、薛、綜、注、淮、南、子、高、誘、注、郭、璞、爾、雅、注、
如、淳、漢、書、注、皆、同、蓋、諸、家、
析、言、之、超、故、統、言、之、也、

私註 (一) 『箋注倭名類聚抄』(二) 卷一「天地部・風雨類」(虹)
(三) 辭書注釈書(四) 江戸時代末期・明治時代初期・文政十年

1827稿、明治十六年1883刊(五) 狩谷掖斎(六) 京都大学文學部
國語學國文學研究室編『諸本集成 倭名類聚抄(本文編)』(昭43、
臨川書店)(七) P. 17
〔考〕『和名類聚抄』(12) 44 の研究書であるが、ほとんど中国古代
〔虹文化〕の引き写し。

65

宣	諸家細字 一枝價銀五分	天	諸家法書 一枝價銀(文百五分)
同	東堂一流 一枝價銀五分	龍鬚友	諸家二行物 一枝價銀(文百八分)
同	子昂指法 一枝價銀五分	貯雲	諸家一行物 一枝價銀(文百二分)
生草	諸家消息 一枝價銀九分	同木軸	同上 一枝價銀六文目
同	東坡一流 一枝價銀九分	同大	諸家大字 一枝價銀十二文目
綴文	諸家習字 一枝價銀六分	同大	同二字書 一枝價銀百足
吐虹	諸家清書 一枝價銀壹文目	同大	同一字書 一枝價銀壹文目

古法帖流之筆大小新製數品目錄畧記

書肆尚書堂 京三條通柳馬場東側 堺屋仁兵衛製

私註 (一) 『吐虹』(四) 古法帖(六) 朝倉治彦監修『近世出版広
告集成』第二卷(昭58、ゆまに書房)
〔考〕「吐虹」は、もともと「蟾蜍」(セウシヤク)、
「蝦蟇」と関係あろう。「比
較研究資料」(12) 参照。

本稿では、日本辞・類・音義書史上、主要と思われるものを資料として採りあげ、そこに記された〈虹〉についての記述を摘出し、これについてコメント風の小考を付加してきたが、その全体像の考察は、「近・現代」の部を加えた次稿に「通考」として記す。

①②……は、『椋山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。